

湘南学園だより



発行：湘南学園だより編集部

contents



「創造と模倣」	
創立85周年 未来への希望を育む湘南学園の教育	
学園生の未来のために～変えるべきものとは～	
『人として 豊かな心を育む教育』	
「挑戦」までの道のり自分の可能性を信じて	
子どもたちに寄り添った小学校英語教育を	
「繋がる力」	
「本校におけるグローバル教育(の一端)について」	
2020年度大学入試について	
5年目のカフェテリア	
「十周年を迎えて」	
学校法人からのご報告	

理事長	内海直人	02
学園長	山田明彦	03
全学教研実行委員長	山田美奈都	04
幼稚園園長	古田優子	05
小学校校長	河本洋子	06
小学校英語主任	武田春菜	07
中学校高等学校校長	木下貴志	08
中高企画主任	吉川謙太郎	09
中高等学校進学指導主任	里吉正	10
湘南食育ラボ理事長	小田拓也	11
後援会会長	田辺真理	11
		12



「創造と模倣」

理事長 内海直人



長い夏休みを終えて2学期がスタートしました。朝夕はめっきりと過ごしやすくなり、確かな秋の訪れを感じています。この秋には、湘南学園では幼稚園の「らんらん」に「ランド（運動会）」、「がちゃべたらん」（造形展）、「小学校の「たいいく表現祭り（運動会）」、「音楽会」、中学高等学校の「学園祭」等、多くの行事が予定されており、保護者の皆様にとって、子供たちの成長ぶりを感ずることのできる大切な学園行事です。これらの学園行事は教職員、保護者、後援会、同窓会、地域住民等の多くの皆様のサポートで成り立っており、日々の皆様のご協力、ご支援に感謝を申し上げます。

未来の教室

子供たちが夏休み期間中である8月下旬に、神奈川県私立中等高等学校協会が主催する理事長・校長研修会に出席しました。この研修の中では、札幌新陽高等学校の荒井優校長による「学校改革のWhy・What・How」、経済産業省商務サービスグループ教育産業室

長の浅野大介氏による「未来の教室とEdtechの未来」など、新たな学校教育への取り組みが語られ、多くの学びがありました。研修において、特に皆さんと共有したい内容には「未来の教室（Learning Innovation）」のコンセプトがあります。「未来の教室」とは、文理融合・社会課題解決等をキーワードに、経済産業省が進める「効率的な知識習得と創造的な課題発見・解決能力育成を両立する新たな学習プログラム」の開発・実証事業」のことで、多くの有識者が集い未来の教室の目指す姿を模索しています。これは誤解を恐れずに言うならば、偏差値教育から脱することであり、これからの社会に通用する「創造的な課題発見・解決力をもった人材（チェンジメーカー）の育成」方法の模索です。学校での学びは、理科や社会科などそれぞれの科目に分かれた自己目的化した学びが多く、子供たちにとっては決して楽しいと言えるものではありません。一方で、職場等で大人が勉強する場合は、プロジェクトを通じて社会問題解決などの目的を持って、教科の垣根なく学ぶ

（文理融合）ため、「勉強が楽しい」とすら感じる場合があります。私が社会人としてMBA（経営学修士課程）に通っていた時も、学ぶ目的があるが故に勉強が楽しいと感じていました。人は課題解決などの目的をもつて初めて自ら学ぼうとし、この「目的」を達成できた時に自身の成長を感じたり、満足感が得られたりします。このように子供たちが「目的」という学びのモチベーションと出会えるよう、社会課題等の目的を設定した科目区別のないプロジェクトベースの学習による学びが重要と感じます。リアルなプロジェクトは「目的」をくれ、「目的」は学ぶことに対しての「ワクワク」を提供してくれれます。そして子供たちは学び方をリアルなプロジェクトから学びます。またこのプロジェクトベース学習は社会に出てから必要となる「目標を達成するために他者と協働する力」、「意見の違いや対立を受け入れ解決する力」、「感情をコントロールする力」、「目標を達成するために計画を立てる力」などの力を育むことができると考えます。

学びの本質

2010年頃からVUCAワールド*という言葉が使われだしたように、世界はものすごいスピードで変化し始めています。その世界でイノベーションは、企業が生き残るため

の原動力として必要不可欠な要素となつていきます。企業はイノベーションを起こすことの出来る人材を求めており、前述の通り創造的な課題発見・解決能力、創造的な発想をもつ人材の育成が必要となつていきます。

*Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧さ）のそれぞれ頭文字をとった言葉

では、どのように創造的な発想をもつ人材を育成するのでしょうか？ 難しく聞こえますが、私は次のような捉え方をしています。

早稲田大学の井上達彦教授は著書である模倣の経営学において「模倣は創造の母である。」と言っています。独自性を追求するからこそ、逆に、模倣の力が大切だということを言っています。また数々の業態革新を行ったウォルマートの創業者であるサム・ウォルトン氏も「私がやったことの大半は、他者の模倣である」と言っています。偉大な会社というものは、模倣から生まれているのです。

茶祖・千利休の教えをまとめた利休道歌には「規矩作法 守り尽くして破るとも 離るるとても本を忘るな」と言う歌があります。武道・芸道などの世界でよく言わ

れる「守・破・離」そして「本」です。「師や先人を模倣し、その教えを忠実に守り基本を身に付け（守）、その後それを打破り（破）、そこから離れて独自の境地を切り開くこと（離）」も大切であるが、そこにある本質は忘れてはならない（本）」と言う意味です。子供たちが学ぶ学校教育の世界においても、同様に考えることができると思います。学園での生活において、様々な専門をもつ先生方から先人の知恵・経験を学び、模倣し（守）、さらに同じクラス、部活、課外活動の仲間たちの発想に影響を受けながら、物事の本質を見抜く感覚（本）を覚えていく段階ではないでしょうか。学園から卒業した後は新天地において「破」「離」の創造的な発想のステージにステップアップしていき、しかしどのステージにおいても「本」を忘れず成長していってほしいと考えています。

この秋に湘南学園は創立85周年という節目を迎えます。現在の法人メンバーになつて半年が経ち、今後も理事会が丸となつて90周年、100周年を見据えた「子供たち、学園の未来のために」を目的とし、法人運営を行って参りたいと考えておりますので、引き続き皆様のご協力をお願い申し上げます。



創立85周年 未来への希望を育む湘南学園の教育

学園長 山田 明彦

幼小中高「総合学園」として つながる教育の願い

中高教員を30年以上務めたが、幼稚園や小学校の教育実践に直接向き合える場面は本当に少なくて、理解が浅かったことを反省します。新たな職責を得て「総合学園の教育力」について改めて理解を深める機会がいろいろありました。

幼稚園では、全教職員が「すべての園児達をみんなで担当する」基本姿勢からまず学んでいます。園児一人ひとりの個性を大切に、小さな変化やチャレンジなどいつも情報を共有し、あそびや行事や生活、どんな場面でも自主性や創造性を育む保育が素晴らしいです。そしてどこでも誰にもさわやかに挨拶して下さる幼稚園スタッフの姿勢に学ぶと思います。入園式や「お泊り保育」はワクワクする楽しさにあふれ、登下校の様子や動物のお世話や高校生との関わりなどで園児達の豊かな表情に出会いました。周りに声をかけ

る笑顔や工夫して行動する、いつも元気な園児達の様子。学園教育の原点がここにあります。

小学校では、入学式など数々の場面でサッと始まる力強い歌声や、6年生を中心に新入生を迎える「たてわり活動」の豊かさにもまず感動しました。江ノ島を前にする全校「交歓会」も先輩が後輩をリードして展開され、圧倒的なインパクトがありました。幼稚園で「リーダー切符」を得た年長児が年中・年少さんをリードする取り組みから続くものであり、中高では「新入生歓迎会」から縦割り「体育祭」と生徒達のリーダーシップや協働力が存分に発揮されます。幼小中高の各パートで教育の願いがそれぞれ結実した実践がみごとに「貫して継続され、人間力を高めていること」に気づかれます。そして小学校では最高の教育環境の中で「教科の本質と学び合いを大切にした授業」を掲げて、年間テーマにもとづく授業・教育研究も旺盛に追究されます。学園小出身の中高生がどのよ

うに探究力や表現力を伸ばしているのか、理解を深める日々でもあります。

中高では、人類的な課題にも向き合い、ESDの理念を軸に教育活動の統合を進める努力が続いています。生徒達の学力と自主性を伸ばし、自分の人生の主人公として活躍できるよう、学年単位の指導や部活動の指導も熱く展開されています。ICT機器を活用した授業の刷新も模索され、総合学習や研修旅行やグローバル体験では国内・海外の社会に生きる方々にお世話になっています。招待や訪問を通じて交流や座談、講演やワークショップ、職業・宿泊体験など様々です。高3生のプレゼン体験では50名以上のお力を受けました。中高6年間を通して「社会に生きる人びとから直接に学ぶ」機会が広がり、在校生支援に間する各界卒業生のご協力もきわめて重要です。「こんな仕事がつながりがあるんだ」「世の中つてすごいな」「自分も持ち味を生かして将来がんばろう」、そんな意欲や抱負を培って卒業してほしいものです。実は幼稚園や小学校でも「社会に生きる人びとから直接に学ぶ」体験学習は年間多彩に展開されています。全学を通してマッピングすると「社会に生きる私学」が鮮明になることでしよう。

学園生が展望を広げて 人生を元気で歩めるように

これから10年・20年間で世の中は激変すると指摘されます。大学入試制度の変更はその序曲であり、総人口縮小や少子高齢社会の影響が進行し、人工知能やロボットの普及で多数の仕事がなくなり、就活も地殻変動を避けられませんか。標準的なライフステージは描きにくく、重層的な人生設計が切実になると予想されます。「世界がスマホでつながる時代」と形容されますが、膨大な情報に囲まれながら情報を上手に選択し、活用して編集し、仕事や人間関係に生かしていく力も大切になります。民族や宗教など様々な差異を越えて互いを理解し合い、協働してコミュニティーをつくる積極性が重要になります。「持続可能な世界」を築き直す現代の使命があり、次世代各自にその大切な出番、活躍の舞台がある

ります。グローバル時代の激しい競争と様々な歪み、先行き見えない情勢から、孤独感や不信任感、対人関係の困難が広がりますが、我々大人も回復力（レジリエンス）が切実に必要です。次世代の不安や閉塞感に「気づき」を重ね、声かけや寄り添いに努めることは自分達にもリターンしてくる大切なこととす。

全学の教育顧問として、淡路雅夫先生をお招きしました。各学校で教育講演会を設けられ、保護者や教員への個別面談を重ねて頂いております。子育てや親子関係をめぐる先生のお話は多数の保護者に深い振り返りと教育の希望を届けられ、学事と経営をめぐる私学の課題にも重要なご教示を頂いています。子どもも大人も受難の時代であるからこそ、学園関係者が教育第一の協議と実行に努め、柔軟な学校運営とPとTの協力体制を深めていくべきとのご指導を受けています。創立85年の節目を迎えるこの秋、「この先5年間の湘南学園」の努力目標や将来像について共通認識を深め、希望と展望を広げていけるように努めていく所存です。皆様方のご教示とご協力をお願い申し上げます。

学園生の未来のために ～変えるべきものとは～

全学教研実行委員会実行委員長 山田美奈都

今年の全学教研のテーマは「学園生の未来のために～変えるべきものとは～」でした。教育改革という言葉が様々な場面で言われるようになり、常に何か新しいことをやらなくてはならないような空気がいつからか教育界に流れ始めました。もちろん、「変えるべきこと」もたくさんありますが、「変えること」が目的となつてしまつてはいけません。「何のために」に常に立ち返り、そのための手段としては何が有効なのかを考え続ける必要があるでしょう。

そのような議論を実行委員会を重ねる中で、そもそも、学校とはどのような場所なのか、湘南学園を子どもたちにとつてどのような場所になつていくべきなのか、そこを、今一度見つめ直したいという思いが共有され、今回の教研は生まれました。

Most likely to succeed

全学教研当日は、まずはじめに、アメリカのサンディエゴ州にあるHigh Tech Highというチャータースクールでの実践をまとめたドキュメンタリー映画「Most likely to succeed」を全学の教員

で観ました。多くの知識を詰め込んで、子ども達の中には残っていない。そうであるならば、その「詰め込み」を手放すことにリスクはないのか。High Tech Highはそのような考えのもと、ここ数十年の「学校」のイメージを覆すような独自の教育を展開しています。従来とは異なる学び方に保護者だけでなく生徒本人も戸惑う姿や学校側の考え方がリアルに描かれており、様々な気づきと学びがありました。

今年は、毎年講師として来ていただいている都留文科大学の佐藤隆教授だけでなく、千代田区立麹町中学校校長の工藤勇一先生もお招きし、本校の山田学園長も含めた3名で映画の内容を踏まえてのパネルディスカッションを行いました。フィンランドの教育や「日本型高学力」と言われる学びの歪みについて、佐藤先生からはいつもながら課題提起を、そして、公立の中学校でありながら様々な改革に実際に取り組んできた工藤先生の話からは多くの刺激をいただきました。

High Tech High、麹町中学校、湘南学園、確かに置かれている環

境や条件は確かに異なります。ただ、同じ時代をこれからも生きていく子ども達が目の前にいるということは変わりません。「学校」はどうあるべきなのか、より良い学びが生まれるには何を大切にすべきなのか。そんな問いへのヒントが多く得られた時間となりました。



分科会

午後の分科会は、午前の部を受けて出された「今、話し合ってみようこと」を元に「学校づくり、教員とは何か・具体的な実践を考える・学力とは何か・子どももやる気

を引き出す評価とは・他校や他国の実践に学ぶ」の6つのテーマに分かれてディスカッションをしました。パートを超えて学園の未来を語り合い模索しようこの時間は、総合学園ならではの、貴重な時間です。一人の人生の大事な「ひと場面」を共に過ごしているということが、教科やパートを超えて対話することで再認識されました。そして、この議論、この学びを明日からの教育活動に繋げていくためにはどうすべきなのか、そのような声が多く聞こえてきました。

これから

教研後のアンケートからは、これまで以上の「熱」がうかがえました。湘南学園は何のために存在していくのか、「最上位の目的への合意形成」、これこそが今学園に必要なことなのだろうとあの場にいた多くの教員が感じたのではないのでしょうか。

私たち大人はその目的達成の「手段」においてもどこかに用意されています。そして、それができただけ普遍的な正解であつてほしいと願っています。しかし、子ども達の気持ちも状況も一人一人異なります。目の前の子ども達と向

き合い、寄りよい手段を皆で模索し続けること、その子の人生を豊にしない手段ならば勇気を持つて変えること、それが私たち大人の「責任」なのではないでしょうか。すべての子どもが安心して通える学園であるために、子どもたちが自分たちの未来に期待を持てるように、我々大人も学びつづけることで歩みを進めることができるのでしょうか。

子どもも大人も共に学び、成長し、皆でつくる学園。この言葉をもっと多くの人たちのものにしていきたいです。湘南学園はそれがきつと実現できる場所です。今回は教員研修でしたが、保護者の方々と子どもたちとも、共に学んで対話する、そのような時間を多くつくっていきたくと考えています。



『人として』

豊かな心を育む教育』



幼稚園園長 古田優子

ます。



五月晴れの五月十七日(木)の出来事です。朝チャボ小屋に子ども達と入ってみますと、小さな木箱の中に雌鳥がひしめき合うかのように重なり合っています。しゃがんで見ると、木箱の中から「ピーピー」という鳴き声が聞こえてきます。雌鳥をそとどかしてみると、なんとも可愛いひよこが羽誕生していました。子ども達は「やったあ。ひよこが産まれた。」と言って、飛び跳ねて喜び合っていました。

ひよこの誕生は、子ども達は勿論、私たち大人にとっても大きな喜びです。

実は五月の連休前より、雌鳥が卵を二十個抱えていました。年長児が毎日お世話をしながら、ひよこがいつ誕生するのか楽しみにしていたところでした。

翌日の朝には二羽目のひよこが、そしてお昼過ぎには四羽のひよこが誕生し、ひよこは全部で七羽になりました。

「かわいいね。」「触りたいな。」「抱っこしたいね。」「と、子ども達は心弾ませながらつぶやいてい

ひよこは、抱卵を始めてから

二十一日目に誕生します。殻の中から口ばしでつついて小さな穴を開け、自らの力が出てくるのです。それには、何時間も、何日もかかることがあります。その間卵から「ピーピー」というヒナの鳴き声がずっと聞こえているのです。なんて神秘的な瞬間なのでしょう。

自らの力を振り絞って殻から出てきたヒナは、体(羽)が濡れていてヨタヨタ歩きます。しかし三時間ほどすると羽もすっかり乾き、ふわふわした可愛いひよこの姿になります。でも直ぐにひよこ

は雌鶏の羽の中に入ってしまう

ます。その様子を見ている子ども達は、「ひよこちゃんも、お母さんが好きなんだね。」「そっだよ。決まっているじゃん。」「と大きく頷き合っています。

ひよこも温かくて心地よい雌鶏の羽の中が、一番安心できるのでしょう。羽の中から出てくると、餌をもらうわけではないのですが、自然と雌鶏の口ばしのごろに集まってくるのです。その光景はまるで人間の親子と重なり合い、とても愛くるしい姿です。子ども達はこのような様子を日々じっくりと見て感じているのです。



二十一日(月)の朝、チャボ小屋に行ってみますと、ひよこが二羽亡くなっていました。その横にもう二羽、卵から孵化できずに亡くなっているひよこがいました。

とても残念なことですが、自然界の成り行きはなかなか厳しく、人間の力ではどうすることもできない難しさに直面しました。

亡くなったひよこを見ると、「どうして死んじゃったの。」「どうして殻から出てこれなかったの。」「かわいそうだよ。」「お母さんチャボは、きっとひよこのことを探しているよ。」「ひよこの口と目に砂がいつばいついていたら、苦しくて死んじゃったのかなあ。」「たぶん、お母さんチャボに押されちゃったんだよ。だってひよこの上にお母さんチャボがいつばいつ乗っていたから。」「死んじゃったひよこは、動かないんだね。」「そうだ。お日さまがあたるところに置いておいたら、また動き出すんじゃないかな。」「など、それぞれ感じたことをつぶやいていました。

亡くなったひよこは、年長児が中心となつて埋葬し、皆で手を合わせました。

『命の誕生』や『別れ』に遭遇する中で、喜びや悲しみなど様々な感情を体験し、生命の営みを学んだり、不思議さを感じ取る貴重な体験となりました。

幼稚園ではチャボの他に、うさぎ・かめ・力フト虫・メダカザリガ

ニダンゴ虫・幼虫など様々な生き物を飼育しています。生き物と触れ合う中で、子ども達の興味関心はどんどん広がっていきます。見たり、触ったり、抱っこしたり、餌をあげたり、お世話をする中で、だんだんと愛おしい気持ちや芽生え、友達のような大切な存在になっていきます。

これからの時代「人として、豊かな心を育む自然環境」は、今まで以上に大切なものとなるでしょう。子ども達が身近に感じられる生き物との触れ合いを通して、全ての生き物は自分達と同じように、たまたまの命を持って生きているということを、五感を通して感じてほしいと願っています。その中で生まれる『いたわりの心』『命の大切さ・尊さ』を感じられるような『豊かな心を育む教育』を展開していきたいと思っています。



「挑戦」までの道のり

自分の可能性を信じて

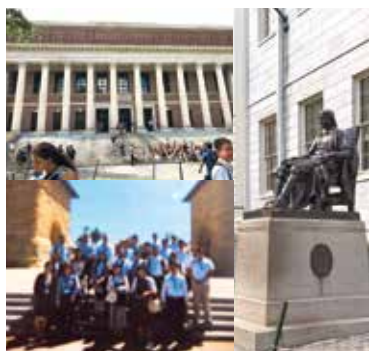
小学校校長 河本洋子

「1」アメリカトップ大学視察に参加して

アメリカには、自分の可能性を信じて、挑戦し続ける土壌がありました。大きな夢とpassion(情熱)を持った人たちが集まり、世界を創っていきます。

この夏、ISA主催の「米国王ワルドランキングトップ大学視察」研修に、併設中高の英語科主任の鈴木純先生と参加する機会を頂きました。

カリフォルニア大学、スタンフォード大学、ハーバード大学、ウェルズリーカレッジ、マサチューセッツ工科大学など12大学を視察する中で「自分の生き様を自分の言葉で表現できる人」を世界のトップが求めていることがわかりました。



①passion 情熱 ②community

コミュニティ ③chemical reaction

化学反応が要で、異なる才能が集まった瞬間にどういう反応を起こすのか、注目されることです。

そこで、トップレベルの大学生に、次のような質問をしてみました。

①「小学校時代はどんなお子さんでしたか？」

●夢中になれることがあると、徹底的に取り組んでいました。

●物静かな目立たない子でした。中国人なのでアメリカに行つてみたいと思っていました。

●アメリカは貧富の差が激しく、私は貧しかったので「アメリカンドリーム」をずっと夢見ていました。高校卒業時に、子どもの頃に感じた想いや体験もエッセイに盛り込んで書いたら、ハーバード大学に合格しました。

②「小学校時代に必要なこと、やっておくべきことは何ですか？」

●とにかく「体験」が大事です。身体で感じる。楽しかった経験や夢中になれることは、自分を

知ることにつながります。

●「Who are you?」自分が誰なのか? どんな人なのか?を知り、モチベーションを上げWin-Winの関係を築くことです。

●総合的な評価では、勉強以外に何をやってたのか?が問われます。色々な体験をしたら、プレゼンすることです。クラスでの発表の時間を大事にして、小学校時代から人前で話すことです。

③「親はどんな方ですか」

●めっちゃくちゃ褒めてくれました。何をしていても「できたこと」を認めてくれました。

大学生のプレゼンを聴くと、頑張るではなく、「enjoy(エンジョイ)」「自分は凄いだよ」と伝えていくことと言います。「日本では褒めてもらえないが、アメリカでは褒めてもらえるから、失敗したところからもう一度挑戦しようと思える」と教えてくれたのは、日本からの多くの留学生でした。

自分の可能性を信じて、「脳」で考えたことを脳から30センチ下の「心」に落とし込み、思ったことを大事にするなど、今回の視察で得た確信をこれからの未来を創る子どもたちに伝えていきます。

「2」元ヤクルトスワローズ

古田敦也さんと野球

この春、開校5年目を迎えた「湘南学園小学校アフタースクール」は、特別企画として5月19日に、古田敦也さんを迎え交流イベントを実施しました。

キャッチボールや質問コーナーでは、古田世代の保護者たちも一緒に参加し、大いに盛り上がりしました。

古田さんは、子どもたちの質問にもわかりやすく回答され、「ピンチの時、どうしたら頑張れますか?」という質問に、

●「これから生きていく上で、人生はピンチの連続。ピンチも楽しむくらいの気持ちで、その気になれば何でもできる。失敗を恐れず自分を信じてやるしかない」とのアドバイスをされました。

祝・NPOアフタースクール



「3」保護者向け講演会で

親も学ぶ

子どもたちの可能性を信じて、親も「待つ」ことの難しさに直面することが多々あります。そこで今年度は、保護者向け「子育て講座」と「教科(算数・国語)講座」の開催に力を入れています。

「ことだま」は響きます。

いただいた言葉や学んだことで気持ちが楽になり、子育てをともに楽しむ(enjoy)ことができれば幸いです。

(1学期)

「子育て講座」全3回

淡路雅夫先生

「算数教室」 仲本正夫先生

「これからの時代に必要能力」 井潤知美先生

「子育て学講座①」 川合良子先生

(2学期)

「松下先生の国語教育講演会」

「子育て学講座②③」全2回 川合良子先生

「子育て講座」全4回 川合良子先生

淡路雅夫先生

「歌舞伎教室講演会」葛西聖司

の小学生のための歌舞伎入門

「SNSリテラシー講座」

「国語アニメーション」

岩辺泰史先生

岩辺泰史先生

Hi!

子どもたちに寄り添った

小学校英語教育を

小学校英語主任

武田春菜

2020年度に向け、小学校英語教育が急速に進む中、湘南学園小学校でも、今年度から英語の授業が全学年週2時間に増えました。前例の少ない中で、目の前の子どもたちに合った英語教育を日々考えながら、進めています。

お土産はなにがいいかな

修学旅行前の6年生の授業では、お土産に買って帰りたい八つ橋の味について、英語で話しました。「Who wants to buy the green tea yatsuhashi?」という声かけに対し、買って帰りたい人だけが手を挙げて、「I want to buy」と答えていきます。

教科書の例文を使って、リピートなどの練習をするのではなく、本当に買いたいと思って、買いたいと英語で言ひたいで、そこに「言葉の意味」がうまれます。当たり前のことですが、本当にそうかどうか、言葉の意味」を大切に授業を進めています。

Touch your ~

「Touch your head.」というかけ声に合わせて、一斉に頭をさわる1年生。このとき、先生は必ずあとから動作を行います。先に先生が動作をしてみようと、それを見れば良いので、英語を聞く必要がなくなってしまうからです。

Who?



Good!!



また、5年生の教室では、

「This Old Man」という歌を先生が歌い出し、「ある動物が出てきました。なんでしょう。」と、効果的に日本語も使いながら問いかけました。すると、最初は集中して聞けていなかった児童もみんな真剣に聞き始めます。答えがわかったところで次の質問です。「How many times could you hear?」このように、集中を保ったまま何度

も何度も聞いていくのです。

子どもたちは耳が良いので、たくさん聞けば自然と話せるようになると言われています。しかし、逆に、そういった「聞く」ことによる言葉の蓄積がなければ、話せるようにならないということですね。なので、子どもたちが聞きたい、聞かなければならないと思えるよう、工夫をしています。

Davidってどんな人?

以上のように、「①言葉の意味」と「②聞くこと」を大切にしながら学習するのに使用しているのがSmileシリーズの教科書です。教科書をメインで使用することはしませんが、教科書のお話を聞いて、どんなことが聞こえたかを話し合ったり、クイズなどで内容を確認したりします。

Smileシリーズでは、魅力的な登場人物がユニークなストーリーを展開します。そのため、教科書の中のお話ですが、子どもたちは登場人物をクラスの仲間のように考え、「Davidだからこんなこと言いそう」と意味を考えたり、「Takuはなんと

言っているのかな」と集中して聞いたりしています。一学期のふりかえりでは、お話の続きを

楽しみにする意見がたくさんありました。

英語で答えられるかな...

英語での問いかけに、わかった! と思っても、英語で答えられないから言いたくないという児童もいます。そういった児童に対しては、教員が隣に寄り添うようにしています。また、教員が我先にと答えて、答え方の例を示すこともあります。そうすることで、挙手をする児童が増え、発話の機会も増えてきました。そういったサポートは、単語だけでなく、文章で正しく答える習慣をつけることにもつながっています。



このように、英語に対する不安を解消するためにも、今年度も、外国人講師と日本人教員のチームティーチングで授業を進めています。発達段階に合わせ、たくさん音にふれることが特に大切な低学年では、外国人講師がメインとなり、意味を

ていねいに確認したい高学年では、日本人教員がメインとなつて

は、日本人教員がメインとなっています。

WHAT?



Wonderful



小学校だからできることを

英語学習のバックグラウンドは、子ども一人ひとり様々で、個別に対応することの必要性を感じることも多くあります。ですが、他の教科や行事とからめて学習を進めたり、クラスで学習することの達成感を感じられるようにしたりして、小学校でみんなが英語を学習する意味を感じられるようにしたいと考えています。

また、英語の授業が週2時間になったからといって、急に英語が話せるようになるわけではありません。ですが、「言葉の意味」と「聞くこと」を大切にしながら小学校での英語学習が、今後の英語学習に必ず役に立つ素地を育てると信じています。

「繋がる力」

中学校高等学校 校長 木下貴志



今から約30年前、中高の教師たちは、本校の教育のあり方について本格的な議論を開始しました。

当時の湘南学園中高の生徒募集用パンフレットには、「男女共学の進学校」と書かれていましたが、「大学に進学することは大切だが、それだけでよいのか」と当時の私たちは考えたのです。真剣でした。

本校には「個性豊かにして身体健全 気品高く 社会の進歩に貢献できる 明朗有為な実力のある人間の育成」という建学の精神があります。これを実現するための教育をしなければならぬ、という誠実な議論を重ねた結果、「特別教育活動（現在の総合学習）」という人格形成のカリキュラムが完成しました。特別教育活動の実施に当たって、現場では粘り強ささまざまな挑戦が重ねられてきました。

中学1年生
「自他の理解と尊重」
中学2年生「身近な地域を知る」
中学3年生「異なった地域を知る」



高校1年生

「日本全体の問題に目を向ける」

高校2年生

「地球規模の問題に目を向ける」

高校3年生

「実社会に生きる人々に学ぶ」

この6年間のカリキュラムでは、高校2年生までに、

「自分」↓「相手」↓「周辺地域」↓

「他地域」↓「日本」↓「世界」と次第に視野が広がり、いよいよ高校3年生の取り組みへと進むのです。

2015年度まで高校3年生の取り組みは、「実社会に生きる人々をお招きして、それぞれの分野で真剣に仕事に取り組みプロフェッショナルの人生に触れることによって、自分自身の人生の方向性を探る」というものでしたが、最近はこの高3の取り組みに変化が起っています。

「実社会に生きる人々をお招きする」は従来通りなのですが、「その方々のお話を聞く」のではなく、「その方々に自分の夢（あるいは人生の設計）についてお話を聞いていただく」というスタイルへと工夫がなされています。つまり「聞く」から「伝える」になったのです。

今年の高3の生徒諸君は、3段階

で「伝える」に取り組みました。

総合学習1回目…「15分間で外部からお招きした方々に『私の夢』を語る」

総合学習2回目…「クラスの仲間に表示する（ここでクラス代表を2名選出）」

総合学習3回目…「クラス代表が学年の仲間に表示する」

プレゼンテーションの方法は各自で自由に考えます。資料の提示や使用言語など、自分で判断して決めるのです。

さて、いよいよ総合学習第3回目が行われました。代表12名の諸君のテーマは以下の通りです。

石丸君「日本中のグルメを食べ尽くして大実業家になる！」
（日本語）

小澤さん「湘南学園の総合学習の課題」
（日本語）

福岡君「about my dream」
（英語）

谷口さん「私の夢」
（日本語）

佐藤君「貧困」
（日本語）

大地君「世界の窓口」
（日本語）

古川君「世論調査って本当に信じていいの？」
（日本語）

奥村君「日本の経済成長」
（日本語）

岩田君「メディアリテラシー」
（英語）

矢部さん「栄養バランスと生活習慣病」
（日本語）

小西君「人と人との関わり」
（日本語）

田實さん「法医学者になる夢」
（日本語）

*（ ）は発表者が用いた言語です。発表者たちのプレゼンテーションには、ある特徴がありました。彼らは「最後まで無事に話す」ではなく、「聞き手が本当に自分の話を理解しているか」に集中していたのです。

発表者のうちの多くが、事前に用意した原稿とは違ったことを話していたのだと思います。彼らは、聴衆の表情を見て、その反応に寄り添いながら、柔軟にプレゼンテーションを進行させていったのです。自身の考えが整理されていなければ、このようなことは決して簡単には出来ないのです。ハイレベルであり、堂々としたものでした。

実は、この発表を素晴らしいものにした要素がもうひとつありました。それは聴衆の「聞く力」の高さだったのです。彼らの「聞く力」が、話し手の力を見事に引き出していたのです。

つまり「話し手」と「聞き手」が繋がっていたのです。発表会場には二体感がありました。

この様子を見ていて私はこのように考えました。

高3の生徒諸君は、この6年間を通じて「互いに繋がる関係」を築き上げていたのです。生徒間には恐らくさまざまな人間関係があるのだと思いますが、彼らは多様な個性を認め合って人と接することの大切さを知っていたのです。聴衆としての彼らの「聞き方」には、常に「受容」「肯定」がありました。彼らは聴衆でありながら「話し手が『聴衆にしてもらいたいこと』」を完全に理解し、それを実行していたのです。ですから発表者の心の中には「安心」が広がっていたはずなのです。

総合学習だけではなく、学校行事での取り組みや部活動などを通じて、湘南学園の生徒諸君が「人との繋がりを大切に行っている姿を目にすることが多くあります。彼らの友人を思う気持ちは実に温かなものであり、それこそがまさに人としての品性です。湘南学園の若者には、グローバル社会を生きるための本質的な力が備わっているのです。



「本校におけるグローバル教育(の二端)について」

中高企画主任 吉川謙太郎



〈留学のメリット〉

「トビタテ―留学Japan」をご存知でしょうか？HPの言葉を借りると、「政府だけではなく、官民協働のもと社会総掛かりで取り組む『留学促進キャンペーン』」というものです。

そして、そのHPには、「留学のメリット」として、「これからの変化が激しく、予測が困難で、正解のない時代を生きて行くためには、自ら『未来を切り拓く力』が必要」であり、「留学によって視野を広げ、自分に力をつけることで、その後の人生の選択肢が大きく広がる」といったことをうたっています。

要は、今、「留学」が大いに推奨されているということです。

〈湘南学園ESDとの共通性〉

特に、「自ら『未来を切り拓

く力』が必要」とする部分については、「湘南学園ESD」を推進するにあたっての問題意識と共通するところが大きいです。そのような力をつけるための手段の一つとして留学があるといえるのではないかと思います。

若いうちに海外に行き、多様性を体感し、日本や自分自身を客観的に見ることでできる視点を養うことは非常に重要であり、本校におけるグローバルセミナーの主眼もそこにあります。

〈本校の現状〉

最近、「在学中の海外留学」や「海外大学への進学」を選択する生徒諸君が、徐々に増加しています。

一方、グローバルセミナーへの参加者数が減少しているという現実もあります。セミナーの行われる夏休みや春休みは、いろいろな活動との調整が難しい

ということもあるでしょうが、「今、自分が何を一番大事にしたいのか」ということも考えて、自分の意志で、できれば積極的に参加してもらいたいと思っています。

また、今年度から、「グローバル・アドバイザー」として栗本明彦氏をお迎えしました。「海外大学への進学」について関心のある生徒や保護者の皆さんの相談をうけてくれます。詳しくは、7月12日付で配布された文書「グローバル・アドバイザーについて（お知らせ）」をご覧ください。

〈2019年度から始まる新しい教育内容について〉

7月2日付で配布された文書「2019年度から始まる新しい教育内容について 生徒全員が参加する取り組み企画について」でもお知らせしたとおり、次年度の中1より、全員参加で

実施する、「中1ヤングアメリカンズ」・「中2校内イングリッシュキャンプ」・「中3海外研修旅行」を、段階的に導入していきます。

「中1ヤングアメリカンズ」については、先行実施という形で、今年度の中1の皆さんも来年3月に実施することになります。「積極的にチャレンジしてこういう姿勢を持てるようになる」「今まで自分でも気づかなかった、『新しい自分』を発見する」といった機会にもなるうと思っています。

中高在校生の皆さんは、「中3海外研修旅行なんて、自分たちには関係ないじゃないか」と思うかもしれません。たしかに、学年全員で海外に行くという経験してもらうことはできないのですが、本校には、複数のグローバルセミナーがあります。また、学校以外の団体等が主催するセミナー等も積極的に紹介しています。先ほども記しましたが、これらに是非、参加してほしいと思います。

なお、現行のグローバルセミナーについては、中3海外研修旅行が導入された後も、より良い形にして継続する方向で考えています。

また、高2国内研修旅行につ

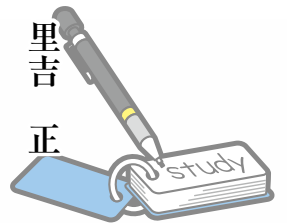
いても、中3海外研修旅行や総合学習とも関連づけて、「軸」をより明確にした活動にしていければと考えているところです。

一言でいえば、全ての学びを繋げていくという「湘南学園ESD」の理念に沿った、新たな教育の構築を着実に進めていくということです。



2020年度大学入試について

中高等学校進学指導主任 里吉 正



・高大接続改革とは

現在文部科学省では、変化の激しい時代において、新たな価値を創造していく力を育成するために、高大接続改革の取組みを進めています。大学の学びを変えるためにはどのようなすればよいのか。まず、3つのポリシーを明確にすることが求められています。

・アドミッションポリシー

大学が育てたい生徒像を明確にし、そういった生徒に入学してもらうための方針を提示することが求められています。英語や数学など教科の知識に長けている、プレゼンテーション力が高い、リーダーシップがとれるなど、様々な要素がそこに示され、それを評価するための試験をすることになるでしょう。AO入試、公募推薦、指定校推薦などは、アドミッションポリシーに即した生徒を評価するのに適した選抜方法だと思われる。

・カリキュラムポリシー

入学した学生をどのような方

法で育てていくのかという教育課程を明示することが求められています。地域と連携したプロジェクトを立ち上げたり、海外の大学と提携して国際交流を積極的に行ったり、体験型の学習を取り入れて社会に通用する学生の育成を目指す大学が増えてきています。

・ディプロマポリシー

学位認定するために身につけてほしい能力、素養を明示することが求められています。

・大学教育が変われば入試が変わる。

社会が著しい変化を見せる中、日本の大学教育も変化を起こさなければなりません。そのため、右記のようなポリシーを明確にすることで大学の学びに変化を促すのが狙いようです。しかし、教育内容が変わるのですからアドミッションポリシーに即した生徒に入学してもらうための入試選抜方法も必然的に変化させなければならぬことになります。

・入試が変われば高等教育も変化する。

従来の知識・技能に特化した入試ではなく、思考力・判断力・表現力を評価する入試、学びに対する主体性なども評価する入試を導入する大学が出てくると思います。

それでは、大学入試がどのような変化をするのか。今は大学側も文科省からおりてきた指針に対して困惑しているのが現状のように思われます。したがって、大学の入試制度がもう少し明確にならないと対応できない部分は多いのは事実です。しかし、今の段階で分かっていることもあるので、少しご紹介しておこうと思います。

・センター試験の代わりに大学入学共通テストを実施

2020年1月実施のセンター試験をもって、センター試験は廃止になります。その代わりに大学入学共通テストが実施されることになっています。センター試験と異なる点は、国語と数学で記述式問題が導入されることです。国

語では80〜120字程度の記述、数学では数学I・Aの範囲で3題の記述式解答が求められる予定です。また、従来のマーク式の問題においても思考力・判断力・表現力を評価できる問題になってきます。

・英語4技能 Listening, Speaking, Reading, Writingにおける外部検定の利用

これまでのセンター試験の英語ではListening, Readingの2技能を評価する試験だったのに対し、大学入学共通テストでは2技能の試験に加え、4技能を評価する外部検定が活用されることになっています。国立大学に入学するためには大学入学共通テスト+英語の資格・検定試験を受験しなければならぬ方針が発表されています。さらに、私立大学においても英語・検定試験を活用した入試が現時点でも増加しています。

・主体性を評価するための調査書の内容変更やJAPAN e-Portfolioなどの活用

生徒たちの主体性を評価するために、調査書の様式が変更されます。「指導上参考になる諸事項」の欄が従来よりも細分化されることや、今までは裏表1枚という制限があったのですが、その制限がなくなることによって備考欄

などかなりの量の文章が書き込めるようになりました。また、JAPAN e-Portfolioというサイトに自分の学習記録を蓄積することができるようになっています。大学側はその情報を引き出すことができ、評価対象にすることも可能になります。上記のような資料をもとに大学は多面的・総合的な評価をしなければならないのです。しかし、実際にその評価をするための時間や労力の問題、さらには公平性の問題などがあり、まだまだ各大学も検討を続けているのが現状です。

・私たちがやるべきことは

大学入試が変化することによって様々な制度が変化することも予想されますが、大切にしたいのは生徒たちが進路を実現させるための力、社会で生きていくために必要な力を育てることです。入試のために記述の練習をするのではなく、表現力が必要だから記述の練習をする。入試のために学習記録をとるのではなく、学習記録をとることで自分の成長を確認し、新たな可能性を見出すことができます。目的は入試を通過することではなく、生徒たちの健やかな成長です。そこを忘れないようにしたいと思っています。

「5年目のカフェテリア」

NPO法人湘南食育ラボ

理事長 小田拓也

はじめに

日頃より、カフェテリアの運営に限りないご支援を賜り誠にありがとうございます。おかげ様で、2013年の開業から本年で5年目を迎えることができました。カフェテリアの開業の経緯は、80周年記念事業に遡ることができま

す。昼食を持参する「弁当文化」がお子さんたちの学園生活を支えてきましたが、80周年を契機に学校を中心に多くの議論を経て、誕生に至りました。

保護者が運営する

「食育による学食」

カフェテリアの運営形態を、どのようにするか？学内で、チーム湘南学園（学校法人湘南学園、PTA、同窓会、後援会）により構成においても活発な議論が交わされた結果、全国でもあまり例を見ない保護者による「学食」が誕生しました。カフェテリアの厨房で、日々料理づくりに携わっているのは、保護者とお母さん方です。年を追って、出食・配食の範囲は広がり、現在は幼稚園、小学校、中高の全学、保護者、地域の皆さんに

ご利用をいただいています。料理づくりの理念は「寮母さんの目線でつくる料理」です。学園を巣立ったお子さんたちが、「ここで食べることができてよかった」と思い出してくれる料理を目指しています。化学調味料、加工食品を極力使用しないレシピの採用、地産地消の食材の幅を広げることを目指し、地域の生産者の皆さんとの連携に取り組んでいます。

開業から、この5年の間でも刻々と環境は変化していることを実感しています。むしろその速度は上がっているようです。アレルギーに悩むお子さんは年々増える傾向にあること、食をめぐる社会的な環境も同様です。湘南食育ラボの活動、運営もこれらの変化に常に目をむけてゆかなければなりません。カフェテリアの存在も、「体によいものを作り食べてもらう」ことに留まらず、日々のお子さんたちの健康や、メンタルの面にも目を配ることもその役割と考えています。学園が取り組む、「食育教育」においても、これを具現化するためのサポート、これまでの運営で得た知見などによる貢献も、その使命だと考えています。

変化する環境と子供たちの

未来のためにできること

「食育」とは、成長期だけのものではなく、明るく健康的な生活を送るための一生ものの知恵といえます。食育することの知識を通じて自分の健康を良好に保つこと、食を取り巻く環境と自分たちが生きる社会を見る確かな目を養うことも、広い意味での「食育」ではないでしょうか。5年目を迎えた今年は、食育「本来の意義を学校と共有しこれからの時代の変化に向き合うための、確かな基盤を作ることに」と考えています。お子さんたちの参加、保護者の皆様との連携が大いに広がることも期待しています。よりよい食環境を目指しこれからも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

「十周年を迎えて」

後援会会長 田辺真理

湘南学園創立七十五周年時、当時理事会の要請により設置された後援会は、今年度、発足十周年を迎えます。PTAのOB・OGである後援会会員は、この十年間、学園子ども達への変らぬ愛情を持ち続け、様々な活動を行ってまいりました。

平成三十年四月二十一日、湘南学園後援会第九回総会及び講演会が開催されました。

総会に先立つての講演会では小山明子さん（女優）に「子ども達の学園時代を振り返って」という題目で、素晴らしい講演を頂きました。学園小学校をご子息慶様がご卒業された時、故大島渚監督が、保護者代表として送られた謝辞の朗読には、多くの方が感涙しました。小山さんは昨年、大変ありがたいことに、ママ友三人で後援会にご入会下さいました。

ステキなご縁と大変感謝しております。



総会にてご報告、ご承認頂きましたが、兼ねてより理事会に申し入れさせて頂いていた、後援会入会システムが今年度より運用されることが正式に決まりました。この取り組みにより、更に多くのご理解頂ける会員の増員に繋がることとなります。それは精神面での応援に加え、金銭面での支援も更に行いたいという願いが元になつております。この運用実現により、湘南学園創立八十周年時に設置された「教育振興基金」に、些少ではございますが毎年寄付させて頂くことになりました。十周年の節目に多少なりともお役に立てることが現実化し、大変喜ばしいことと存じます。

これまでの主な活動内容とし

ては、チーム湘南学園の一員として、法人・PTA・同窓会・湘南食育ラボの様々なイベントに参加協力すること。中でも、毎年参加させて頂くPTAバザーは、お手伝い下さる会員相互の懇親の場であることは勿論のこと、日頃からお世話になっているPTAの方々との交流、子ども達とも触れ合える場所として不可欠なものとなっております。

また、近年、学園が力を注いでいるグローバル教育支援の一環として、ヤングアメリカンズへの支援。留学生のホームステイお手伝い、小学校開催「リテリシユヒルズイングリッシュセミナー」のお手伝いもしております。一昨年ご提案させて頂いた、「後援会英語力向上機会提供プログラム」を、幼稚園から高校まで、より一層のご活用を願えば幸いです。

今後、子ども達の無限に広がる可能性や、学園の未来に役立つような、更に一歩前進できるような応援をしていかなければと思います！



《学校法人から》

【理事会報告】

これまでに、次の理事会を開催いたしましたのでご報告いたします。

- 第1回定例理事会 4月7日
- 第1回臨時理事会 4月20日
- 第2回臨時理事会 4月28日
- 第3回臨時理事会 5月11日
- 第2回定例理事会 5月26日
- 第4回臨時理事会 6月8日
- 第3回定例理事会 6月23日
- 第5回臨時理事会 7月6日
- 第4回定例理事会 7月21日
- 第5回定例理事会 8月18日

【主要な議題・報告等】

- ・理事長の選任について
- ・常務理事3名以内の選任について
- ・理事長・副理事長を代行する理事・代行順位の指名について
- ・私学共済事業団からの借入金に係る連帯保証人の変更について
- ・中高IT教育設備整備事業に關するiPad初期設定等の費用の支払について

- ・2018年度神奈川県私立中高協会の負担金等の支払いについて
- ・2019年度学校案内パンフレット制作の支払について
- ・法人系システムの年間保守サポート費用の支払について
- ・教務システムパッケージソフト導入初期費用の支払について

- ・小学校特別事業 カラー印刷機の導入について
- ・小学校教育課程改訂について
- ・貸与PCリプレースについて
- ・SKYSEAライセンス更新およびバージョンアップについて

- ・理事会顧問の採用について
- ・幼稚園特別事業 長期修繕工事の見積参加業者について
- ・スポーツ振興センター災害共済給付掛金の支払いについて
- ・2017（平成29）年度事業報告書（案）について
- ・2017（平成29）年度決算書（案）について
- ・監事候補者の選出について
- ・第4回評議員会の開催（理事補充のための評議員会）について
- ・2017（平成29）年度事業報告書の確定について
- ・2017（平成29）年度決算書の確定について

- ・監事の選任について
- ・2018年度夏季賞与の仮払いについて
- ・中高グラウンドメンテナンス工事発注業者の選定について
- ・幼稚園特別事業 長期修繕工事業者の選定について
- ・監査法人の選定について
- ・クラウドファンディング継続のための費用の支払いについて
- ・次期システム（学園NW機器リプレース）について
- ・iFILTERアップグレードについて
- ・中高空調機オーバーホール及び全熱交換器内部洗浄
- ・幼稚園ホール舞台増床工事
- ・中高情報科が進めるICT環境整備について
- ・2018（平成30）年度補正予算書案について
- ・固定資産（小学校メディアセンターの図書資料）の除却について
- ・AED5台のリース契約業者選定について

【評議員会報告】

これまでに開催された評議員会についてご報告いたします。

- 第1回評議員会 4月7日
- 第2回評議員会 4月28日
- 第3回評議員会 5月26日
- 第4回評議員会 6月23日
- 第5回評議員会 7月21日

【主要な諮問事項等】

- ・理事の選任について
- ・理事長の代行について
- ・2017（平成29）年度事業報告書（案）について
- ・2017（平成29）年度決算書（案）について
- ・監事候補者について
- ・第四号理事の選任について
- ・2018（平成30）年度補正予算書案について



【事務局からのご連絡】

〔住所変更のお手続きについて〕

お引越しの事由により、ご登録頂いている住所が変更された場合は、誠に恐れ入りますが、住所変更のお手続きをお願い申し上げます。なお住所変更に係る所定の様式は、事務局に準備させて頂いておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

〔登下校・登降園時の自家用車送迎禁止について〕

湘南学園では、園児・児童・生徒の登下校・登降園にあたっては、自家用車での送迎は原則禁止とさせて頂いております。園児・児童・生徒の安全確保はもとより、近隣の住民の方等への安全配慮もご考慮いただき、改めてご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。なお、園児・児童・生徒の病気や怪我等の特別な事情で止むを得ない場合は、必ず事前に学校（園）にご連絡くださいますようお願い申し上げます。